
竜宮ドライブ（高校生の異次元探索モノ）

やった

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜宮ドライブ（高校生の異次元探索モノ）

【Nコード】

N8941Z

【作者名】

やった

【あらすじ】

触れた相手を異次元に飛ばす能力を持つ浦島と、カメが異次元を冒険する話

・竜宮ドライブ

・プロローグ

0

誰の目から見ても絶体絶命だった。

うしろしまはなこ

裏嶋華子は薄暗く人目につかない路地裏の先、袋小路に追い込まれ、囲まれていた。

三人の男は狭い間隔で、壁にぎりぎりぶつからないように横に並び立っている。

その手にはバット、ナイフ、メリケンサック。特に中央を陣取る金髪の男は目を赤々と充血させており、息を荒くしながら頬の筋肉を引きつらせていた。並々ならぬ怒りが伺える。

「自分への冥福を祈る準備は万全か？ 言っておくが、失禁程度じゃ済まさねえからな」

カラカラと音を立てながら、バットを地面に這わせる。しかし華子は笑っていた。

「あは、日本国民が祈りを語るなんて抱腹絶倒だね。ところで人類、一つ聞いていいかな？」

「減らず口を……時間稼ぎのつもりか？ 悪いが、冥土の土産なら用意してねえぞ」

「か弱くて可愛い女の子の頼みを聞かないわけ？ いいから答えなよ、人類。あなたたちさ、神様って信じる？ っていう、ただそれだけの質問なんだから」

「信じねえよ。だから冥土の土産に意味はねえ。冥福を祈る意味もねえ。で、満足か？」

中央の男がにじり寄る。壁に背を預けた少女は、しかし怯えた様子を見せなかった。

「そういう人外が存在がいたら、会ってみたいと思う？ 神様とか悪魔とか天使とか妖怪とか」

「ああ、是非とも会ってみたいね。さーて、お喋りはここまでだ。失禁シヨーを始めるぜ？」

金髪の男がバットを振り上げる。醜く口元をつり上げながら、少女に向かってその凶器を振り下ろした――はずだった。

ただそれよりも早く、少女は動いていた。『右手』でそっと、中央の男に触れる。

次の瞬間、男の表情から生気が消え失せた。口を大きく開いたまま彼は一步、二歩と後退し、震えながら尻餅をつく。「あ、あ、あ、あ」とぶつ切りに小さく呟きながら、大人げなく失禁した。濡れたジーンズになんて目もくれない男。その焦点はまるで合っており、何かに怯えるように宙を泳いでいた。まるでリアルな悪夢でも見たかのような、そんな絶望の色。

他の二人は、何が何だか分からないといった様子で呆然と立ち尽くしていた。

「あれ、二人とも混乱しちゃったかな？ ま、いきなり目の前でリーダーにアンモニア臭ぶちまけられたら、それもそつか。こんな時はさ、現状に対する整然たる理解が欲しいよね？」

につこりと微笑みながら、華子は右腕の袖を捲る。開いて閉じてを繰り返しながら、俊敏な動作で掌を二人の腹に叩きつけた。

ダダン、という二連撃の後、二人の男は漠然と膝を折る。最初の男同様にズボンを湿らせながら、男たちは表情を固め、受け身をとる様子も見せずにつつ伏せに倒れた。

「失禁程度で済んで良かったね」

「はい、人類。華子は軽快な調子で、男たちの合間を抜けていくのだった。」

「……裏嶋華子？」

「そう、裏嶋華子。なんでも、先祖はお伽噺で有名な、あの浦島太郎って話だぜ。自称だけど」

「うっわ、胡散臭い。きつと、その子が選んだ最初のポケモソはゼニガメだな」

「お前が言うなよ、お前が。自分の百メートル走のタイムを言ってみろ、カメックス」

「二十二秒だ、えっへん」

「ホント、運動神経はカスなのに見た目と口だけは達者だよな……
亀よ」

中村光一は呆れ口調で言った。彼は亀田銀太郎とは違って運動神経が抜群に良い。天然パーマが自然かつ乱雑に立ち上がった銀太郎の頭部は、まるで伸び盛りの雑草のようだったが、光一はそれとは正反対に、重力に逆らわないようにしてしなやかな茶毛を靡かせている。

柔和な印象を振りまく光一を、じいつと睨み付ける銀太郎。その視線が鋭いのは、決して表情のせいだけではない。元より、そうなのだ。

——最初はヤンキーかと思った。銀太郎は数え切れないくらいにこの言葉を聞いてきた。色素の薄い逆立った髪に加え、百九十に達する身長、目が合うともれなく逸らされる一重の鋭い双眸。ポケットに手をつっ込んでがに股で歩くというクセも災いし、小学校、中学校、高校と、いつ如何なる場面でも完全にヤンキー扱いだった。

——ただし、最初だけ。

「話が逸れた。とにかく来週やって来る『転入生』には気をつけろよ、亀。奴は隣町で有名な女番長だ。理由は定かじゃないが、『歩く精神科』って呼ばれていて——かなり怖いそうだ」

「怖い……？ うう……やだなあ……」

とたん、百九十の巨体が涙目になる。

「だーっ、うるうるすんな気持ち悪い！」

そう、実は打たれ弱かった。運動神経はからつきしで、喧嘩は全戦全敗の猛者である。身なりのせいで期待をされては落胆され、身なりのせいで絡まれては落胆され、散々の人生。

一向に直らない泣き虫癖は周りの同情どころかどん引きを買うが、茶目っ気のある性格のおかげでいじめられずには済んでいた。代わりに、いじられキャラとして台頭した。見た目に反して泣き虫だったり運動音痴だったりする銀太郎は、そのギャップを気に入られ、『亀』の愛称で親しまれている。周りの女子からも『亀』と冗談交じりに罵られる姿は、事情を知らない人間からしたら非常に滑稽に映るだろう。が、そんな扱いにも文句がないのが銀太郎である。

「まあ、近付かない限りは大丈夫だ。クラスも違っし。だから安心しろ、いざとなったら……」

「まさか光……僕を……こんな僕を守ってくれるの……？」

「ああ、任せておけよ。お前がピンチの時、俺は身体を張ってお前の前から全力で立ち去ろう」

「ひどい！　ともにミサンガを括りあった親友の台詞とは思えないよ！？」

「うつせえ！　俺よりデカいお前を守るとかキモいんだよ！　絵的にキモいんだよ！」

銀太郎と光一はともに二年生。放課後、誰もいない教室のことだった。

「うあああつ！」

はいばらたかまさ

丑三つ時に埴原隆正は飛び起きる。見慣れた自室が視界に広がっていることを確認し、安堵した。隆正は小柄な少女に右手をかざされて以来、精神に少しばかり支障をきたしている。

「はあはあ……くそっ、くそお……またあの夢だ……あの、悪夢……」

金髪が揺れる。あの時、隆正が経験した『一時間』は、まさに地獄そのものだった。

人工物が一切ない広大な土地が突如として眼前に広がったが、何故か足元は血だらけだった。振り返ると、ぬめりとした巨大なナメクジのような化け物が、口を開いて待っていた。

訳も分からぬまま、彼は食される。噛まれることもなく、丸呑みで体内へ。胃液の臭いは醜悪で、直ぐに吐いた。何かに触れながら藻掻いてみるが、どうにもならない。目が暗さに慣れると、触れていた何かを認識することが出来た。それは肉が半分ほど溶け落ちた、人間だった。

既に嘔吐を何度も繰り返していた隆正は、喉が潰れて叫ぶことから出来なかった。

何故か、そこに至るまでの経緯を覚えていなかった。思考能力は低下し、それまでの記憶を失い、子どもようになっていた。隆正という人間はこの世界で生まれ、次の瞬間に食された。ただ自分の運命、絶望的なバッドエンドを子どもながらに夢想し、呼吸を止めた。

屍に触れながら、自らの肉も溶け落ちていく。体中が熱い。痛い。臭い。死にたい。

そうして一時間後。正しい記憶と、大人の思考と、正常な世界が還ってきた時、全ては崩れ去った。地獄の一時間は隆正に絶対的な恐怖を与え、更正不能なトラウマを脳裏に刻んでいた。

失禁は当然だった。異なる記憶を持った二つの個体が混ざり合う感覚は、言葉に出来ない程に不愉快で、思考と記憶は必然に狂い、生理機能は正常を失い、ありとあらゆる部分が弛緩し、結果、ああなった。少女の右手に触れてからの記憶は、鮮烈でありながら曖昧だった。

路地裏に少女を追い詰めたときは夕方のはずだったが、正気を取り戻したときは既に夜。

——ああ、なんだ、夢か。心底ホツとした隆正は、しかし二人の仲間の状態を見て、それがただの『偶発的な夢』なんかではないということを悟った。

結論。少女——女番長、裏嶋華子は普通の人間ではない。隆正は完全に失念していたが、彼女は『歩く精神科』の異名を持っている。今まで、それは『裏嶋は狂った人間である』という意味で捉えていたが、実際は違ったのだ。『裏嶋は人を狂わせる』。それが正解だった。

「本当だ……あいつに触れたら、化け物が見えたんだ……！」

「……精神科でも紹介しようか？」

「っていつか隆ちゃん、失禁ってマジ？」

恥の上塗りを恐れ、そこで話を止めた。こんな話は誰も信じない。とはいえ復讐する気なんて起きるはずもない。二度と近付きたくない。あの右手には触れたくない。それが本音だった。

裏嶋華子にはもう一つ異名があるということを、隆正は知らない。『悪夢の右手』。今の隆正なら十分納得がいくであろう、そんな異名だった。

裏嶋華子は友達を作らない。

彼女が銀太郎の通う西北沢高校に転入して三日目、早くもそんな噂が飛び交っていた。

今はもう十月であり、修学旅行も終わってしまった。打ち解けきった生徒の輪に入ることは難しく、今からでは部活動もままならない。つまりはそういうことなのだろうと、銀太郎は解釈した。

——裏嶋華子は、最初の友達作りに失敗したのである。

「私に近付くなオーラを出しまくってたらしいな。ま、番長の噂も広まってたし、当然っちゃ当然かもね。それに彼女、『歩く精神科』のみならず、『悪夢の右手』とかいう異名もあるらしいぜ。相当パUNCHが効いてるんだろうな……あ、今の笑うところな？」

そんな光一の話、銀太郎は寂しげに聞いていた。

思うことがあったのだ。もしかしたら彼女は不良ではないのではないか——なんて、光一に言えば間違いなく馬鹿にされる類の、ぶっ飛んだ考えが浮かんでは消える。

根拠というか、理由になりそうな事件があった。話は先日遡る。

その日銀太郎は日直で、教師にゴミ捨てを任されていた。ため息を吐きつつ焼却炉に生ゴミを投下し、踵を返した直後、偶然その光景に出くわした。

しゃがみ込み、校舎裏に住み着き人に慣れた野良猫を切なげに撫でる転入生。夕日の赤光に映える黒い直毛は後ろ側で結わえられており、規定より大分短いスカートに髪先が届く。

ぼうつとその背を眺めていると、彼女は立ち上がり、銀太郎の方に振り返った。

人の思考を根刮ぎ奪ってしまうような、全身からくる美貌がそこにあった。

気後れを感じさせない切れ長の瞳が、その奥に神秘的な雰囲気を感じさせている。他を寄せ付けられない慄然とした佇まいは、武道のそれを思わせる。

そんな彼女が、初対面の相手に向かってこう言ったのだ。

「おい人類。あなた、今日から飼育委員になれ」

いきなりの命令形だった。しかも意味不明だ。あらぬ方向に尖った転入生の物言いを受けて、銀太郎が「え、なにこいつ」という顔を見ると、やれやれといった仕草を見せる。

「安心しなよ、ウチも飼育委員だから。けど、猫科生命体って初めてなの。前の学校にはいなかったの。ウチ、知識は皆無だし、どうしようもないから……人類、手伝え」

そこに突っ立っていたのが運の尽きよ、と彼女は付け加えた。目を点にしていると、

「……しょうがないな。明日からでいいよ、明日からで。明日の放課後集合ね」

「いや、待て。いろいろ待ってください。まず僕の都合とか、拒否権とか」

「それはウチの都合と、あなたの拒否権を拒否するウチの権利で相

殺。あとは？」

「いや……あとは、って……そもそもこの学校に飼育委員なんていう役職はないんだけど」

「けど、猫はいる。そうでしょ？ ……可哀想じゃん。こんなに人に慣れちゃってさ」

「……可哀想？」

その感想に、首を捻った。銀太郎は知っていたのだ。その猫は、なんだかんだで一部の生徒から弁当の残りなどを与えられ、結果的に裕福に育っているということ。

「生きるために人に媚びているんだよ、コイツ。だから飼育するの、鍛え直すの」

「へ……？ 餌をあげたいんじゃないの？」

「なんでそんなことをウチがしなきゃいけないの？ ウチはね、孤高なる猫科生命体が人類の支配より逃れる、そんな野性味溢れる新時代を目指したいの。革命が見たいの」

「革命！？ なんかぶっそうなんだけど！ 余計お断りだよ！」

「ふーん……じゃあ聞くけどさ、人に媚びる人生って、楽しいと思う？」

「何だよ急に。まあ、楽しくはないかもね。けどどこかで媚びなきゃ、いつかは孤独になるよ」

「孤独への恐怖？ それは自分の弱さを認めていることと同義だね。つまらん男。さすが人類」

「う、うるさいな、ほつといてくれよ。っていうか、なんで説教されてんだよ僕」

「丁度いいかもね。猫科生命体を鍛えることで、あなたも強さを身につけたらいいよ」

「待って、僕を置いて話を進めないで！ っていうか、さつきから意味が分からないよ！」

「理解への恐怖？ それは頭の悪さを認めていることと同義だね。くだらん男。さすが人類」

「よく分からないけどひどい……」

急に涙目になった。銀太郎の耐久度は臨界点に達し、少女の刃に貫かれる。

「……その見た目とのギャップは吐き気を催すね。気分悪くなったから帰る。また明日ね」

最後に言葉の暴力で止めを刺しながら、彼女は離れていく。そうして、一言。

「一応、友達ってことにしといてあげる。ウチは裏嶋華子。よろしくなさい」

えっと、僕は……と銀太郎が呟こうとした時、彼女——華子の姿は既にそこになかった。

それでも銀太郎は思った。彼女は想像以上に横暴だけど、それ以上生き生きしている、と。

彼女の冷徹さには感情と意志が伴っていた。歪んでいるものの、僅かに暖かみもあった。

「……友達、ね。舎弟の間違いな気がしてならないよ……まったく、性格の悪いヤツだなあ」

放課後集合というアバウトな決定を思い返しながら、銀太郎は乾いた笑いを溢した。

以上、回想終了。銀太郎は放課後のチャイムとともにカバンに教科書を詰める。帰宅部であるため、用事なんてない。転入生への人間的興味に後押しされ、あるいは彼女が猫をスパルタ気味に特訓するのを何とか止めたい一心で、焼却炉前を目指すことにした。

「さて、まずはあなたに『六時間目の授業』をプレゼントしようかな」

——人類に媚びた猫科生命体の話、興味あるでしょ？

胸に押し当てられた右掌。あるいはその瞬間より、銀太郎の物語は始まったのかもしれない。

そこは既に、日本ではなかった。

・ 1

1

一面が、汚れなき白に覆われていた。例えるなら、ここは雪上の未来都市である。新宿も真っ青になるであろう円柱状の高層ビルは天まで届く勢いで、空には自動車と飛行機を合わせたような小型の乗り物が、物音一つ立てず、縦横無尽に空を駆けていた。

それでいて、あらゆるものが雪色に染まっている。吐く息さえ、真っ白だった。

「え？ え？ ……寒っ！」

銀太郎は状況を理解出来ず、とりあえず両手で自らの肩を抱いた。足は自然と内股になり、寒さのあまり小刻みに震えてしまう。

雪が積もった道路の上に突っ立っていた。とはいえ、銀太郎はこんな都会なんて知る由もない。慌てて近くを見渡すと、そこには見慣れた顔があった。

「お、おい、なんだよ、これ、僕たちどうなったの！？」

視線の先に裏嶋華子がいた。突然「六時間目の授業を始める」などと言って、銀太郎に触れてきた転入生の少女だ。横に並び立って呆然と突っ立っている彼女に、とりあえず話を振った。

「……………ゆき」

「へ？」

「ゆきいいいいいいっ！」

バフン。

華子は突然、誰の足跡もないビル脇の雪上にダイブした。口を開けて、疑問符と感嘆符を交互に浮かべざるを得ない。意味不明だった。

「……………夢、か？」

銀太郎は呟く。見上げれば巨大なタワーに空飛ぶレーシングカー。

見下ろせば雪にダイブしてコロコロと転がる裏嶋華子。ついさっきまで焼却炉にいたことを考慮すれば、この状況は明らかにおかしかった。よって、これは夢である。銀太郎は自らをそう納得させることにした。

「えいつ！」

「あぶつ！？」

雪を投げつけられた。異常な冷たさだった。

普通ならここで怒って投げ返すところだろうが、銀太郎の場合はちよつとだけ違う。

「う……やめろよお……」

鼻をすすりながら後退する。痛いのも寒いのも大嫌いだった。唇を噛みしめながら、やめてと懇願するのが精一杯。それが銀太郎クオリティなのである。

「あは！」

そんな様子を面白がる華子。一方的な雪合戦がしばらく続いた。

「あの……すみません、あなたたちは……？」

ややあつて、ビルから自動ドアを超えて、銀髪の少女が出てきた。すすり泣いていた銀太郎は慌てて涙を拭い、彼女を見つめ返す。

ふんわりとしたウェーブのかかった長髪は、白い世界の中にあつてなお美しかった。おっとりとした表情からは温厚そうな性格が伺え、眉は華子のように鋭角ではなく、弧を描いている。

すっぴんに近いが、肌は雪に負けない程に白い。身長は銀太郎より十センチ低い程度で、あどけない表情や仕草に反して長身、スタイルも抜群だった。特にバストには目を見張るものがある——華子のもものと比べながら、銀太郎はそんなことを考えて唸った。

しかし、唸っている場合ではない。見とれている場合ではない。

「えつと……日本人です。ここ、どこですか？ ロシアですか？」

銀太郎が突飛な返しをした理由は、少女の瞳の色にあった。透き通るような碧眼だったのである。彼女が喋っているのは日本語だっ

たが、彼女はどう見ても日本人ではない。

一面に広がる銀世界と、北海道並みの気温の低さ。加えてビルの高さ。夢であるにしたって、日本という設定でいいはずがなかった。だから尋ねたのだ。ここはロシアか、と。

すると、予想の斜め上をいく答えが返ってきた。

「まさか……異世界の方ですか？ まあ、ようこそ！ 私はカグヤ。カグヤ＝ルナです。この世界に名はありませんが、この国には名があります。プラズム、といいます」

銀髪碧眼の少女、カグヤは両手を合わせて喜んだ。ぽかんと口を開けていると、

「どうぞ、こちらへ。お話を聞きましょう」

いきなり強引に引っ張って行かれるのだった。

「あううううっ、ゆき、ゆきいっ！」

何故だか幼児退行してしまっている華子をがしつと掴み、引きずる。銀太郎がカグヤに引きずられ、華子が銀太郎に引きずられるという、何とも奇妙な形のまま入り口へと吸い込まれていくのだった。

「……なるほど。そういうことでしたか……」

ふむ、と頷くカグヤは、コーヒーを冷ましながら真剣な表情で銀太郎を見つめていた。

半透明のカラフルな紙のようなものがあちこちに浮いており、部屋の家具は蒼と白のみで彩られている。材質はメタリック調のようで、センスがあるのかないのか銀太郎には判断しかねる前衛的な部屋であった。もちろん、コップも寒さを感じるような色である。

「そうなんですよ。触れた瞬間、いきなりここに。で、相棒はご覧の通りです」

銀太郎は、すっかり寝てしまった華子を顎と視線で差し、はははと乾いた笑いを溢す。夢の中で夢を見始めるきっかけを『異界人』に話す、という今現在進行中の行為は、ぶっとびすぎていてもはや好きにしてくれという感じだった。

「そうですか……でも、それにしても冷静ですね？　取り乱したりしないんですね？」

「まあ……ぶっちゃけ夢だと思ってますからね……」

夢の中の住人にぶっちゃける。

「ふふっ、そうかもしれないね。でも、いらしてくださって嬉しいです」

につこりと微笑み、コーヒーを口元へ。目で人を殺せるんじゃないかと勘ぐりたくなる美貌。

「けど、そっちこそ落ち着いてますよね。僕ならいきなり異世界から人が来たっていう設定、到底呑み込めませんよ。いい病院紹介しようか？　とか思っちゃいますね、きっと」

「あら、だったらいい病院紹介しましょうか？」

——こんなに可憐なボケ、見たことないです！

銀太郎はついつい肯定してしまう。

「是非！」

「ふふっ、冗談です。ところで、聞きたいのは『人類に媚びた猫科生命体』の話でしたよね？」

「え？　まあ、聞きたいのは僕じゃないですけど……まあ、そうですね」

銀太郎は、ようやくコーヒーに手をつける。猫舌なので、冷まさないければ飲めもしないのだ。

「だったら、ここに飛んできた理由も納得です」

「納得？」

「ええ、だってこの世界、宇宙人に侵略されちゃってますから」

——ハイ？

「えっと……僕っていつからそんな厨二病みたいな夢を見るようになったんですかね？」

「そういう夢もあるんです。とにかく、私たち人類は征服されました。『宇宙生命体に媚びた人類』が、今の私たちってことですね」

にぱあと満面の笑みで非現実。自然、銀太郎も笑顔になった。馬

鹿馬鹿しくて。

「やっぱ足は八本とかでした？ それとも、肌が灰色？」

「うーん、猫が直立している感じですかね？ 語尾にニヤンが付きますよ、彼ら」

この世界が百パーセント夢で構成されているだろうということを、銀太郎はこの時悟った。

「なんでそんなのに征服されたんですか？ 猫じゃらしとかで戦えば良かったのに」

「試しましたが……彼らは巨大なので、ダメージが見込めませんでした」

本当に馬鹿馬鹿しくなってきた。早く目を覚ましてくたくたを寝るが、徒労に終わる。

「はぁ……で、巨大猫に勝てなくて媚びてるんですか？ それにしては平和つすねー」

仕方なく、厨二病夢トークに付き合うことにした。

「こちらから攻撃を加えない限り、彼らは何もしてきません。それどころか、どこからか持ってきた貴重な保存食を分け与えてくれるんです。それらは味が絶品であることから『天食』と呼ばれました。彼らは自らに媚びてくる人間を愛し、餌付けするかのように『天食』を無限に振る舞います。結果として、働かずとも媚びさえ売っていけば生活は出来るんです」

つまり、と彼女はまとめる。

「宇宙生命体のペットになれば、働かずに暮らせる世界——それが、この世界なんですよ」

「ふーん……」

銀太郎の頭に過ぎるのは、華子の言葉だった。

——じゃあ聞くけどさ、人に媚びる人生って、楽しいと思う？

「媚びる人生って、楽しいのかな？」

「プライドがなければ、それなりに。なにより、楽です」

「君も……カグヤさんも、そうやって生きてるの？」

「はい。そうやって生きてます。このビルも彼らに与えられ、住まわせて貰ってます」

「……そうなんだ」

声のトーンが落ちる。何となく、がっかりしたのだ。夢とはいえ、カグヤが宇宙人のペットであるという事実。同じ人類として、銀太郎はショックを受けた。

「媚びるって……どんなことするの？」

「んー、ご主人様ご飯ください、って踊りながら懇願したり、ですかね？ 麻薬的に美味しいんです、『天食』は。一度食べたなら、媚びを売ってでも食べたくなります」

「……。誰か、その巨大猫宇宙人とやらの反乱したりしないの？」

「昔はあったみたいですけど、今はめつきりですね。『天食』にありつけないのは困りますから。こっちだって、あっちを利用してやるうって感じなんです。実質、支配されていたとしても、その状況によって得られるものがあれば、結局のところ相互依存関係なんですよ」

「相互依存関係……？」

首を捻りつつ、意見を言った。

「支配されているんだとしても、人類としての誇りを持つべきなんじゃないかな。それこそ、宇宙人の手なんか借りず——」

「だったら、食べてみますか？ 『天食』」

すう、と立ち上がり、カグヤは冷蔵庫と思われる半円筒状のボックスから、真っ白のお弁当箱のようなものを取り出した。それを銀太郎が腰掛けるソファの目の前、蒼いテーブルの上に置き、ぱかっと上蓋を開ける。中は、ゼリーのような透明でプルプルしたものによって埋め尽くされていた。——なるほど、保存食っぽい。とても美味しそうには見えない。

「……遠慮したいかなー、なんて。ほら、僕、異世界人だし」

夢の中で下手物は食べたくない。それが本音だった。

「いいからいいから、あーん」

「いや、その、ちょ……あーん」

銀太郎は本能に逆らえず、あっさりとそれを口にしてしまった。

——そこで、記憶終了。

「……という、そんな夢だ」

「むう……おかしいなあ……それ」

眉を顰めているのはカグヤではない。華子だ。華子といっても幼児退行したりお昼寝したり華子ではない。現実生きる華子が、銀太郎の目の前に腕を組んで立っていた。

雪の世界——銀太郎が見ていた夢はいつの間にか終わっていて、気付けば焼却炉前である。

なんだ、やっぱり夢かあ、なんて、仰向けになりながら思っていたら、華子が突然汗だくになりながら揺さぶりをかけてきたのだ。そうして、説明を強制的に要求されて今に至る。

「もう一度確認するよ。あっちに行った時、あなた、記憶喪失になっ
てなかったってこと？」

「ああ、なってなかった。普通だった」

「感情的になったりもしなかったってこと？」

「ああ、しなかった。普通だった」

「思考力が低下して、幼児退行もしなかったってこと？」

「そりやお前だ。僕は普通だった」

「……で、ウチもその場にいたってこと？」

「うん。雪にダイブしてた。昼寝してた。つねつても起きなかった」

「く、くうーっ！ わ、忘れて！ ウチのそういうところは忘れて！
っていうか忘れる！」

幼児退行を指摘されて、顔を真っ赤に染め上げる華子。膝蹴りが銀太郎の腹部を捉える。

「あぶっ！？ ぐ……な。なにするんだよう……」

「だから、なんでそこでそんなダメンス的リアクションをとっちゃ
うわけ、あなたは！ はあ、もういいです、ウチが悪かったから……」

…うん、もう蹴らないから……で、それで、さ」

ずい、と涙目の銀太郎に顔が近付いてくる。

「な、なに？」

「人類。あなた、何者なの？」

——こっちの台詞である。

銀太郎は絶句する。話を聞いていた限り、『夢』は華子によって見せられていた——ような節があった。現象に対し、理解がありすぎるからだ。普通なら「宇宙生命体に征服された世界の夢を見た？ あんたバカア？」という反応になりそうだが、しかし華子は不自然なほどに、「なるほど」と、それを受け入れたのだ。明らかに普通ではない。

「僕は普通の高校生だよ。君こそ何者？ さっきの夢は、まさか君が？」

「ようやく気付いた？ そだね、ウチの仕業。この右手はね、悪夢を見せる右手なの」

「——『悪夢の右手』、か」

彼女の異名を思い出す。そうして、同時に理解した。

裏嶋華子は、厨二病を煩っているのだと。

「いい病院紹介しようか」

「間に合ってるよ。ウチ、『歩く精神科』だし。ねえ、それよりさ、

さらに、ずい、と顔が近付く。銀太郎の頬が紅葉した。

「人類、今の体調は？」

「すこぶる良好かな。蹴られたお腹以外は」

「記憶の混乱は？」

「ないね。状況に頭は混乱しっぱなしだけど」

「ちょびつとくらい漏れなかった？」

「何が……？」

首を傾げた。華子は、はあ、と息を漏らして後退していく。

「名前教えて。三秒以内に。さもなければ股間を蹴り潰すよ。泣く

まで」

「亀田銀太郎」

一秒以内に答えた。

「ふーん……亀か。ウチにピッタリのパートナーね。あ、ウチのことは華子って呼んで」

「華子」

反射的に、これまた一秒以内に答えてしまう銀太郎。

「あなた、なんだか気持ち悪いなあ……まあ、仕方ないか」

「やれやれといった表情だ。しかし、こっちがやれやれな銀太郎はムツとする。」

「亀。あなたは裏嶋一族に尽くす義務の元に生まれた星になってちようだい」

「意味分らないです」

「ウチに仕えろ、って言うてるの。理由は不明だけど、あなたには特別な力があるっぽいから」

「厨二病ごっこは家でやってく……痛い！　痛い！　ごめんなさい！　うつ……」

「ウチに仕えろ。三秒以内に——」

「仕えますっ！」

「ん、素直だね」

銀太郎は帰りたい気持ちでいっぱいだった。

「いい？　よく聞いて。普通、ウチの作った夢の中では誰もが弱体化するの。記憶を一時的に失って、理性が効かなくなって、思考力が低下して幼児化する。それはウチも例外じゃないの。けど亀、あなただけは何故か違う。それに当てはまらない。まったく……なんでなの？」

「知らないっす……」

「しかもね、ウチが飛ばしたのはあなただけだった。ウチは自分自身を飛ばしていない。これは間違いないの。なのに、ウチはあなたに釣られるようにして飛んでしまった。なんで？」

「知らないっす……」

「なんで知らないの！？ この亀！ ウスノロ！ 八方駄目人間！
完全にとばっちりなのだった。」

「けど、役に立つよ、亀。ウチはこの能力——『竜宮ドライブ』を
よく理解してないから」

「……なんて？」

「『竜宮ドライブ』」

「えっと……悪夢を見せる、技名か何か？」

「当たり前じゃん」

「……由来は？」

「ウチ、浦島太郎の子孫なの。で、なんかまるで誰かを竜宮城に連
れて行くかの如き能力でしょ？ 竜宮城にい、行ってみればあー、
っていう歌詞あるじゃん。それをちよつとカッコよくして、『竜宮
ドライブ』ってわけ」

ふふんと鼻を鳴らす華子は、自信満々にそう答えた。

「ちなみに、この右腕は『魂手^{たまて}』と名付けたよ。あ、玉手箱の玉じ
やなくて、魂のタマね。ほら、玉手箱の玉だと、なんだか男性の玉
を手で触るみたいでなんか嫌でさ」

「女の子がそんなこと言っちゃだめだよ！」

「一方、魂の魂手だと、なんか相手の魂を夢に誘う手、みたいじゃ
ん？ かつこいいなって」

銀太郎のツツコミは完全に無視だった。華子は人の話を聞かない。
さすが、友達がいらない転入生は伊達ではなかった。

「まあ、とにかく、ウチはこの竜宮ドライブの力をあまり理解しき
れてないの。自分で飛んでも意味分らないし、気持ち悪くなるし
……あ、最近は慣れたけど。かといって、その辺のヤンキーを飛ば
して夢の世界を調査させようとしても、ひいひい言うだけで使えな
くてさ」

彼女の悪名が轟いた理由が、判明した瞬間だった。

「分かったのは、記憶が一時的になくなるとか、幼児退行とか、そ

のへんが限界。あと、高確率で『意識した世界』に行っちゃうみたいだね。だから最近、神とか悪魔とか人外染みたものを意識させて飛ばして、ヤンキーを失禁させるのがマイブームだったんだけど」「マジ同情する」

「……亀は、どうやら例外みたい。本当は、なんかそれっぽい猫と人の世界に飛ばして、混乱させてビビらせて、ウチの下僕として飼育するつもりだったんだけど、予想外」

「飼育委員を飼育する気だったの！」

「うん、それが六時間目の授業の内容。人に媚びなきゃいけない猫の気持ちを、あなたが猫、ウチが主人になることで、分からせようと思ってたの」

「真顔で怖いこと言うなよ！」

銀太郎は怯えきっていた。この転人生は想像以上にタチが悪い。

「いいじゃん。結局亀つてば、ビビらず普通に戻ってきたみたいだし……だから、そんな亀だからこそ出来ることをやって欲しいの……だめかな？」

わざとらしく首を曲げて目を潤ませてくる。しかし、こんな手に乗る銀太郎ではない。

「う、うん、いいけど」

訂正、こんな手に乗る銀太郎だった。

「うんうん、それでこそウチに忠実な亀だね。じゃあ命令……いや、お願いなんだけど」

もはや何となく察しはついていたが、一応尋ねる。

「お願いって？」

「調べて欲しいの。夢の世界を。ウチの能力の秘密を。この世界との関係を」

大体、思った通りだった。

「……調べても分からないかもしれないよ？」

「調べられなくて分からないよりはマシでしょ？ とにかく亀は、夢の世界をしらみつぶしに探索して、秘密を探って、ウチに毎回千

字でレポートを提出すること」

「え、宿題付きなの!？」

「ちなみに、夢の世界にいられるのは最大で一時間だけ。世界は無数にあつて、多分、行く度に世界は変わるんだと思う。今のところ、夢の世界に行ったヤンキーに死人は出てないけど、死にかけたつばいのは何人かいるから一応生死にも気をつけてね」

「ちよつと待て」

「あと、ウチが君に巻き込まれてついて行っちゃった現象。次もあれが起こったら、亀はウチを全力で守ってね」

「でも」

「分かった?」

「……はあ、分かったよ」

銀太郎は渋々頷いた。押しに弱いのである。

「今日のところは、これでいいよ。亀に巻き込まれたせいで、ウチ体力使ったし。数時間くらい竜宮ドライブは使えないかな……まったく、他人に使う分にはいいけど、自分で使う分には相当使い勝手が悪いんだよね、これ……」

華子は独りごちた。そんな様子をため息混じりに見つめる。

「じゃあ、帰るよ」

「え、帰るの!？ 野良猫はいいの？ 特訓するとか言ってたけど」

「ああ、あれはもうどうでもいいかな。新しい目標が出来たのでそっちにシフト」

「なんだよ……ちよつと……」

「……?」

——ちよつと、媚びない生き方に理解が沸き始めたのに。そう言おうと思ったが、止めた。

おかしな亀ね、死ねばいいよ——と、華子に鼻で笑われた。

「なあ、亀。お前もしかして……浦嶋華子と付き合ってるのか？」
「ぶっ」

昼休み、屋上。銀太郎は全力でオレンジジュースを吹いた。やっぱりそうか、と光一が探偵の眼差しを向けてくる。ここ数日の間に、あらぬ疑惑を持たれたようだった。

「な、なんだよ、なんで、急に、そんな」

「いや……だってお前ら、焼却炉前なんていう辺鄙な場所でも密会しているっぽいじゃん。あんなところ、ゴミ捨ての時くらいしか行かないしさ。どう考えても怪しいっての」

「あ、あれは……」

言葉に詰まる。言い訳を考えた。

「猫を……特訓していたんだ。人間に媚びないように強く生きろって」

「よし、分かった、お前が強く生きろ。で、付き合ってるのか？」

「っ、付き合ってるん！」

噛んだ。

「そうか……そうだったか。ええい、皆まで言うな、俺は祝福するよ。……とはいえ、これは一大ニュースだ……自称・浦島太郎の子孫と、亀が……ううん、俺、誰にも言わないからさ！　じゃあ俺、ちよつと皆と噂話してくるわ！　けど誰にも言わないから、じゃあな！　……みんなあ、聞いてくれビッグニュースだあ！　なんとあの亀が——」

「え、あ、ちよ、違う！　違うんだあーっ！」

銀太郎の訴えは届かず、光一は走り去ってしまった。

『最初の夢』から、既に一週間。銀太郎は華子（幼児退行モード）とともに、あれから四つの世界に足を踏み入れた。

お菓子の世界。喋る動物の世界。翼が生えた人の世界。そして先

日冒険した——海底の世界。

特に海底世界に華子（毒舌モード）は興味津々で、レポートはいつもの倍、二千字提出を義務付けられてしまった。本日はその提出日であり、千八百字しか書いていない銀太郎は若干鬱だった。そんな時に限って光一の誤解である。疲れすぎていて、追う気にもなれない。

「ほとんど毎日、夢の異世界に行ってレポート書いて……しんどいなあ、実際」

はあ、と愚痴を溢す。夢とはいえ、毎日が日帰り旅行の感覚だった。疲労感は尋常ではない。

分かったことと言えば、『意識すればそれに近い世界に行けるが現実ではない』ということ、『大体的場合、異世界に理解のある者が近くにいる』ということ、『基本的に日本語は都合良く万国共通設定である』ということ、『人型が多い』ということ、『怪我をしても現実の肉体は無傷のまま』ということ、『世界を移動する時は衣服もセツト』ということくらいだった。

加えて、『夢の世界で一時間が経過しても、現実世界の時間は止まったまま』というルールもあった。つまり、一時間に渡る夢は現実には一瞬の出来事。それはまさに、夢だった。

「しかし、昨日のは大変だったなあ」

銀太郎は思い返す。近未来的な海底都市の中、異世界の勇者として偉そうな老人に歓迎され、飲み騒いだ。銀太郎は未成年だったが、あちらの世界では十五歳で成人らしく、思い切り飲まされてしまったのだ。さりげなく人生初の飲酒であり、そのまま粗相を犯してしまった。

偉そうな老人のつるつるの頭に向かって、酔った勢いで唾を吐いてしまったのである。

「……いや…………マジでないわ…………」

そこから先の生死のやり取りは、本当に危険かつぎりぎりだった。時間が既に五十五分経過していたため、華子を抱えたまま五分間逃

げ延びることで、何とか生還した。

基本的に、一時間より早く戻ることは不可能である。正確には、退行した華子に頼み込めば何とかなるのだが、喋る動物の世界では、それだけで十五分を浪費してしまった。

よって、逃げる最中に緊急離脱、なんていう選択肢はない。華子を説得している暇があつたら、一目散に逃げた方が良いからだ。

銀太郎の中でルールが出来上がりつつあつた。すなわち、『冒険するならラスト五分』。それまでの間に誰かを敵に回すのは危険すぎる。最初はいくまで穏便に迎合し、思い切った行動は最後に回す。もつとも、そもそも思い切った行動なんて取らなければいい、という話だが。故にあくまで、それは『どうしてもそうしなければならぬ時』に限る。

「やれやれ……」

思いに耽りつつ、コロツケパンを口に放り込んだ。

と、そんな時、屋上が勢いよく開け放たれる。

「おい亀！　なんでウチとあなたが専属性交パートナー契約を結んだことになってるのかな！？」

「……むぐっ」

喉に詰まらせた。

「……なるほど、噂の尾びれか。やっかいだね、まあ、いいか」

あっさり納得した華子は、それより、と話を切り替えた。それよりってことはないと思つたが、銀太郎は華子がそわそわしている理由を察し、レポートを手渡した。

「そうそう、これこれ！　海底って聞くだけでウチのヘモグロビンが夜通し踊り狂うかも」

「概要は昨日言った通りだぞ？　そんな新しい情報なんて……」

「それはウチが決めること。ふむふむ……うーん、乙姫様っぽい人間はゼロかあ……」

華子は海底都市を竜宮城に重ねていた。自らが浦島太郎の子孫で

あることから、そういったものに敏感なのだろう。彼女は竜宮ドライヴの能力の手がかりが竜宮城にあると考えている。

「残念ながら、オッサンから玉手箱っぽいものも貰えなかった」

「亀が唾なんて吐くからだし。ホント使えない全方位馬鹿だね」

「せめて一方位くらい頭のいい僕に譲ってくれ！」

などと、くだらないやり取りをしながらも、華子はレポートを読み終わる。

「うん、なかなか楽しかったかな。マイナス二〇点つてところだね」

「良かった……ってマイナス！？こんなに頑張ったのに！」

「睡かけた時点で最悪でしょ？　っていうか、ウチまで死にかけたっばいじゃん。うん、死にかけた記憶あるよ、曖昧だけど」

じつとりとした目で見つめられる。華子は基本的に、退行時の出来事をあまり覚えてはいない。思考力が著しく低下しているため、記憶する力も弱くなっているのだと言っていた。

もつとも、それでも残るだけマシだという。なんせ彼女は銀太郎とは違って、夢の世界に行くとき普段は毎回記憶がゼロに等しくなるのだから。一時的とはいえ、これは相当不便である。

彼女が一人で夢の世界を探索できない理由は、子守りをする中ではつきりと理解した。

喋る動物の世界で退行モードの華子がお漏らしをした時は、いろんな意味で大変だった。

余談だが、帰ってから大変だった。

「まあ、とにかく、次も海底イメージで行くから。意地でも竜宮城を探してやるんだから」

「……。昨日の世界に行ってしまったことを切実に願いますです」

「いい？　竜宮城をイメージすんだからね？　分かった？」

「へいへい……」

既に、今から飛ばされる流れが出来ていた。ジュースを飲み干し、深呼吸。

彼女の魂手が銀太郎の胸に触れた。六回目のダイブが、始まる。

「——竜宮ドライヴッ！」

「……でか」

銀太郎が最初に漏らした感想は、その巨大さについてのものだった。

一本の円柱が天を突く勢いで伸びており、そして見上げればそこにあるのは空ではなく、海面だった。海底は二度目だが、先日のもれよりもさらに深い位置にいる。海底といっても、街全体が透明な半球に囲まれており、水圧は感じられなかった。深呼吸をすると酸素が肺に入り、人が生活できる環境であることが直ぐに分かった。

見渡すと、そこは中世の街のようだった。あるいはそれよりももっと古い、西洋的な石造りの町並み。中央の円柱タワーも、ピサの斜塔のように見えなくはない。乗用車なんて概念はなく、薄い布きれを羽織った男女が、不幸せそうによたよたと歩くだけだった。

塔から少し離れた露店街、民家と思われる無骨な建物の屋根。今回は、そのようなよく分からない場所の上に『召喚』されたらしい。これは銀太郎の仮説だが、夢と現実を繋ぐ、世界の架け橋となる人間が毎回必ず近くにいる。彼らが銀太郎たちの存在を欲して無意識に『召喚』するのだと、そう解釈していた。

需要と供給の一致。竜宮城を求める銀太郎側と、異世界の人間を求める夢の住人側。その利害が一致したとき、夢と現実が繋がる——気のせいかもしれないが、そんな気がしていた。

「あのでっかい塔が竜宮城かな？」

「おっきいの！　ながいの！」

きやつきやと騒ぐ幼児退行少女を無視しながら、改めて塔を眺めてみる。近付くだけで三十分はかかりそうだった。——これは、おちおちしていられないかもしれない。

「あの……もしかして、神様ですか？」

「うわ!？」

振り返って落ちそうになる。まるで気付かなかったが、屋根の上

にはもう一人、人間が立っていた。背後に突っ立つ背筋の悪い、気弱そうな男性。ベージュ色のローブのようなものに身を包んでおり、おずおずと銀太郎たちに視線を向けている。

「やっぱり神様なんですね……！ その見慣れない衣装、高い背丈……漆黒の髪！」

「いや、その」

「で、でも……顔が怖いです……も、もしかして、悪い神様ですか？」

「違います……」

顔のことを言われるとへこむのが銀太郎である。

「じゃあ、正義の神様ですか？」

「まあ……どちらかといえば」

「じゃあ、竜宮城にいる悪い神様、倒してください！」

……竜宮城、だって？ 唐突な展開に啞然とする。

「……あー。詳しく頼む」

「かみさま！ かみさま！」

何故かぽかぽかと優しく背中を叩いてくる華子の額をがっしりと押さえながら、銀太郎は話を聞くことにした。ちなみに、夢の世界では銀太郎の立場は基本的に華子より上である。

「……というわけです」

「なるほど」

屋根の上で胡座をかきながら、話を聞き終えた。

要点をまとめると以下の通りだ。

一、七百年前に、突然街がまるごと海底に沈み、その時に塔が出来た。

二、街は沈んだが、しかし何故か呼吸が可能で、酪農場なども無事であり、生活が出来た。

三、これらは悪い神様の仕業で、その悪い神様は竜宮城に住んでいる。

四、重い税を神様に課せられ、多くの人間が払えずに殺されていた。

五、悪い神様を竜宮城から追い出して、街を救って欲しい。

「僕の母は病に冒されています。父は悪い神様に殺されました。僕だけでは母を養いきれず、母は病気の身体を酷使して、働こうと躍りになっています……どうにもならないんです。僕が自分の食事を抜いて、母に渡そうとしても拒絶されます。無理矢理食べさせたら吐かれました。——母は、働いてわざと死ぬ気なんです。母は自分のことを足手まといだと思っています。僕はそれが嫌で……どうにかしたくて……けど、先月友人とともに反乱を起こしたら、友人は皆殺しで……僕だけが運悪く生き残ってしまつて……死のうと思つて……でも、仇を……取りたくて……母を……救いたくて……けど勝てなくて……それで、僕は……神様を……うつ」

最後の方は、涙声でよく聞き取れなかった。しかし、事情は理解する。

この世界はいわゆる、海底RPGだ。魔王のような存在がいて、村人が困っている。そして、さしずめ銀太郎はどこからともなく現れた勇者である。お膳立てはいきなりばつちりだった。

「勝てるかは分からないけど、接触してみるよ。僕も竜宮城は何としても調べたいからね」

悪い神様、というのは、もしかしたら華子がいうところの乙姫かもしれない。

喧嘩して勝てるなどという愚かな考えはまるで浮かばないが、交渉の余地があると判断した。

既に十分が経過しており、塔に着く頃には残り二十分程度になるだろう。登って交渉して、おそらく時間的にはピッタリだ。決裂しても逃げられる。もっとも、神様が塔の頂上にいて、塔の中が螺旋階段とかいう設定だったら、二十分での到達は絶対不可能であるが。銀太郎は、「いらっしやい」と神様が気さくに一階の玄関(?)から出てくることを願った。

「有り難う御座います、神様……！ 母を助けてください……！」
「いや、はは……あんまり期待はしないでねマジで……」

顔が引きつる。喧嘩最弱の銀太郎にとって、この手の期待は非常に苦手だ。昔から強そうな見た目に期待されては、悉く裏切ってきた。銀太郎は、他人の期待を裏切ることに対し、ある程度耐性が出てしまっていたが、それにしただけで期待されるのは苦手だった。

出来れば期待に応えたいが、無理なものは無理である。銀太郎は自分が『不可能だ』と認識したことに対しては、かなりドライなのだった。

結論から言うと、何とかしたい気持ちはあるが、絶対に何とかしようという気概はない。

だから銀太郎は言葉を濁すのだった。——あまり期待しないように——。

「……ここです。ここが、竜宮城です、神様」

青年——ナギリは言った。彼は「ともに戦います！」などと勇敢な言葉を掲げて勝手についてきたのだった。一時間で消えてしまうという銀太郎たちの運命を告げても、彼の意志は変わらない。「一時間助けてくれるだけで十分です！」と言い切った戦士の瞳からは、もはや会ったばかりの虚弱な雰囲気が消え失せていた。

喧嘩最弱の銀太郎は、内心「うわぁ……」となっていた。なんせ、銀太郎は『神様』なんて名ばかりの、ただの人間である。相手が本物の神様だったら一体どうしろというのか？ 悪魔や宇宙人、海底都市、喋る動物、天使のように翼が生えた人間。あらゆる人外どんとこいの夢世界において、相手が最強の神様という線は全然有り得ることだった。

おそらく、銀太郎はナギリの足を引っ張るだろう。ナギリに借りた装飾のない槍は、重すぎて持つだけで精一杯だった。「行きますか！」と槍を振り回しながら張り切るナギリを見ると、その力量さに愕然として冷や汗が止まらない。

銀太郎と華子は一時間で消えるため、死に至る前に逃げ延びることが可能だろうし、あるいは、現実世界に傷が反映されないことと同様、こつちの世界で死んでも現実には反映されない可能性も高い。夢はあくまで夢であり、経験でしかない——というのが、銀太郎が打ち立てたもう一つの仮説である。つまり、この世界で何しようが、この世界がどうなるうが、銀太郎からしたら『単なる夢』でしかない、ということだ。

しかしナギリは違う。ナギリにとってはここが現実だ。さらりの流れる彼のブロンドヘアの質感は、リアルそのものだ。夢とはいえ、彼には感情があり、世界がある。彼にとってはこの世界が現実なのだ。決して無下にしていい命なんかではない——とも思う。

そんな彼が銀太郎についてくる。これはつまり、『最悪の場合、銀太郎たちは逃げ延びるがナギリは死ぬ』ということだった。いくら何でも、それはさすがに気分が悪い。

「なあ、やつぱり、僕たちに任せて君は帰った方が……」

「ですから、いいえ。神様の手を借りただけでも、僕は罪な男なんです。本当は自分たちの力で何とかしなくてはならないのに……僕は神様にすがってしまいました。呼び出して、気付いたんです。僕はずるい人間でした。その上、神様だけに命を賭けさせることなんて出来ません」

「……僕ら神は、この世界では多分死なない。不死なんだ。君とは違う。君は死んでしまう」

「元より、死んだはずの命です。今更惜しくはありません！」

海のように深い瞳に、炎が宿っていた。止められないことを、改めて確認する結果となった。

「神様でも……僕を止めることは出来ません！」

叫びながら、彼は塔を囲っていた門を軽々と飛び越え、中へと駆け抜けていった。

「あ、ちょ！……え、この門二・五メートルくらいあるよ！？」

……ああ、もう、登れと」

既にすやすやと寝息を立てていた華子を、おんぶしている真つ最中だった。

この状況でこの高さの門はキツいなあ、とか思っていたら、勝手に開いた。

「神様、門を開けました！ 早く！」

……何となく、実力を見抜かれているような、そんな気がした。

「よくいらっしやいましたね」

一階、大広間に悪い神様はいらっしゃった。

兵の姿はない。ただ男が二人、ワインを片手にくつろいでいただけだった。

赤い絨毯にレンガ造りの内装。中世の城のようであり、舞踏会場のようでもある。丸いテーブルの上には白のテーブルクロスが敷かれており、それを『悪い神様』が優雅に囲んでいた。

挨拶をしてきた男。年は二十代前半のようであり、パーマがかかったようにうねったボブヘアは黒一色に染まっていた。銀太郎以上につり上がった目は鋭く、しかし表情は柔和だった。

黒の地に赤い花柄の刺繍が入った和服を羽織っており、明らかに世界観を無視した風貌である。——何となく、同じ臭いを察した。

同時に、もう一人の男が立ち上がった。圧倒的に異風な彼は、その一番の根拠となる巨大なアフロを揺らしている。目には世界観を無視したサングラス。服装はアロハシャツだった。

ここで、銀太郎は確信する。彼らは、『この世界の住人ではない』。

「悪い神様、僕はお前たちを許さない！」

「おめえはうぜえなんだよ、ハゲ。黙れやカス」

突然槍を片手に迫ったナギリを、アフロの男がいきなり吹き飛ばした。

「があっ!？」

訳も分からず、転がり、仰向けに倒れる。何が起こったのか、銀

太郎にはさっぱりだった。

「……さて、君たちは私たちと同類ですね？　あるいは、私たちの同類に飛ばされたました？」

意味不明のまま、質問が投げかけられる。何も答えられずにいると、和服の男は続けた。

「おや、その服装……日本ですか。なつかしいですねえ。ふむ……つまり、竜宮城なるものを求めてここにやって来た、ということでしょうか？」

「に、日本を知ってるのか……！　お前ら日本人なのか！？」

「やれやれ、質問しているのはこっちなんですけどね。まあ、いいでしょう。私たちは日本人ではありません。歴とした、この世界の住人ですよ。ただ私たちの先祖は——七百年前にこの地にやって来た、『王』^{みずのえ}の者らしいですがね」

「王の者……？」

「ふむ、そちらでは情報が失われましたか。まあ、正直、こちらでもほとんど分かってはいないんですけどね。つまり、王の者は人が進化した存在ってことです。君も、ここにいるなら分かっているのでしょう？　その力の異常っぷりを……ってまさか、記憶喪失型の劣化ですか？　ここに来る前のこと、覚えてなかったりします？」

「いや……覚えている。お前たちはここで……何を……？」

「そうですね。ふむ……私たちは、この竜宮城を守っているだけです。先祖代々の教えなんですよ。この城が盗られれば能力を失う——そう教えられているものですから」

「能力……？」

「ですから、^{たまた}珠手のことですよ。この現実世界から異世界に潜る、あるいは潜らせる力です」

「この現実世界……？　待ってくれ、この世界は夢の世界なんじゃないのか？」

「君からしたら夢みたいなものでしょうね。逆に私たちからしたら、君の世界が夢みたいなものなんですよ。さて、そろそろこちらから

も質問させていただきますよ?」

和服の男の雰囲気やや重くなる。

「君は壬の者ですか?」

「……いや、違う」

「……。そうですか。劣化現象が見られないのに、他者……使い手は血に恵まれましたね。では、君をここに飛ばした者は、日本にいるのですか?」

「……何故、それを尋ねる?」

「ふむ。その言い方からして、君を飛ばした人間と君は協力関係にありそうですね。利用されている、という訳ではなさそうです。そして、どうやらその方は日本にいと……ところで、その背中で寝ている少女は?」

「関係ないよ。偶然巻き込まただけ」

嫌な予感がした。だから、咄嗟に嘘を吐いた。内心では、心臓がバクバク鳴っていた。

警報に続く警報。——こいつらは、やばい。

「ふむ、同時に飛ばせるんですか……羨ましいですね、私は一階層につき、一つまでなので」

「……?」

「まあ、状況は理解しました。確か日本には浦島太郎という物語がありましたね。それを頼りに竜宮城をイメージし、ここに辿り着いた……ということでしょう。さて、ここで重要な質問を一つしますよ、お兄さん」

「……っ」

咄嗟に身構えた。とはいえ、華子を背負ったままなので構えもクソもない。頭が真っ白で、既にナギリことは頭から消えてしまっていた。それぐらい、衝撃的な出会いだった。

「君の目的はなんですか?」

……静寂が広がる。ごくりと固唾を呑み込む。吟味しながら、銀太郎は言葉を紡いだ。

「力の正体を解き明かすため、かな。僕を飛ばした人は、自分の能力を理解出来ていない。だから、解明したい。竜宮城をイメージすれば、答えに近付ける気がした、から」

「……そうですか。それを聞いて安心しました。でしたら、ヒントを差し上げましょう」

シニカルに微笑む和服のパーマ男が、ゆっくりと立ち上がった。とたん、彼が居座っていた椅子が、ぼろぼろと崩れる。

「これが私の力です。珠手は奥が深いんですよ？ ……そしてもう一つ。知識を深めたければ、同類に会うことです。試しに日本で、『壬の者に会いたい』と願ってみてはいかがでしょう？ きつと、現れますよ。日本は素敵な国ですからね。そして、彼らにいろいろと質問をすればいい。おそらく答えてくれますよ。壬の者は、私のように性格がいい人ばかりですから」

そこで時間が過ぎた。世界は一瞬にして屋上の色を取り戻す。ナギリがその後どうなったかは、結局分からず終いだった。

・ . 3

3

「……つまり、ウチ以外にも、竜宮ドライブの使い手がいるってこと？」

「うん、そうっぽい。壬の者って名乗ってたけど……」

放課後。竜宮ドライブ使用の影響で偏頭痛が発生した華子を気遣って、話は学校終わりのファミリーレストランで行われた。華子のテーブルにはアイスが乗ったホットケーキの他、何故かピクルスが二皿ほど並べられている。「食え、カメ、あなた草食でしょ」とのことだった。

「みずのえ……ねえ？ 亀、あなた浦島太郎に関するもつとも古い書記って知ってる？」

「さあ……日本むかしばなし？」

「超近代じゃん。違うよ、一番古いのは『日本書紀』。約千四百年前の話だよ」

「ふーん……」

「いい？ それによるとね、主人公は浦島太郎じゃなくて、水江浦嶋子みずのえのうらしまのこなの。いろんな説があるけど、水江が名字で、浦嶋が名前、子は親しんで添える称、っていう説が有力。何が言いたいかわかる？」

「みずのえ……王みずのえ……あつ！」

「そういうこと。亀が会ったって言う王の者はつまり、浦島太郎の子孫……なんじゃないかな。どうこの推理、いい線いつてる気がしない？」

「ふふん、と誇らしげである。いつも寝てばかりの幼児退行とのギャップが激しすぎる。」

「えーっと、つまり？」

「千四百年前に、浦島太郎は能力を身につけた。きつと、竜宮城に行ったからだね。そしてその力——竜宮ドライブは子孫たちにも宿っていた。それがあらゆる世界に散らばった」

「なるほどね……あれ、じゃあ、もしかしてさ、華子のご両親も使えるの？ その、竜宮ドライブってやつ」

「いいえ。ウチのパパもママもからつきだし、お爺ちゃんの代も、曾お爺ちゃんの代も、そんな話はなかった。調べたから間違いないよ。その時に、自分が浦島太郎の子孫だってことを知ったんだ。あと、タマテのこともね」

「……？」

首を傾げた。そんな様子を察して、華子が続ける。

「ああ、タマテのこと？ なんかね、不思議な力が宿る的な絵があつてさ、そこに一言だけ、カタカナでタマテって書いてあったの。多分、能力に関する唯一の参考資料。ウチは元々、それを頼りに勝手に魂手っていう漢字を作ったわけ」

空に字を書きながら言った。

「いや、それもそうなんだけどさ。そもそも、本当に浦島太郎の子

孫なの？」

訝しむような視線を送った。「はあ？」という表情が返ってきた。「いや、だってさ、華子の名字、裏嶋じゃん。まず漢字が変じゃん。なんていうか、すごい偽物っぽいぞ。それに、浦島太郎の本当の名字はミズノエなんだろ？ もう全然原型ないじゃん」

「う、うるさい！ それはウチもちよっと思っただけど、わけがあるもん、わけが！」

ムキになる華子。勢いにビビッて、思わず両手で顔を隠しながら「ひいっ」と声を漏らす。

「つまり、ウチの家系は途中で水江の性を捨てたの。多分、千年以上昔に」

かなりアバウトな上に全く論理性がないのだった。

「よくそんなんで自分のことを浦島太郎の子孫だなんて言えたもんだな……」

「うーん、家宝があつたからね」

「家宝？」

「そ、『玉手箱』。正真正銘の玉手箱が、ウチにあるんだよね」
超胡散臭かった。

「開いたら僕もダンディな老人になれるかな」

「うーん、今のパロディな顔を捨てるのは結構勿体ない気がするけど」

「ひどい！」

「いいからピクルス食べ、亀」

本当に酷い扱い用だった。昔亀を助けたお伽噺の浦島太郎とは大違いである。

「残念ながら箱だけ。ただ材質がこの世界のものじゃないの」

「材質……？」

「簡単に言つと、重さがないの。試しに体重計に乗せてみたけど、〇キログラムだったよ。にも関わらず、重力には従う。殴ったら痛い。確実に物質として存在しているのに、重さがない——触っていい

ると気持ちが悪くなるんだ、アレ。この世の物理法則がねじ曲げられるように」

「……ふーん」

「一切色あせない黒塗りの箱の上蓋に『タマテバコ』って刻んであってね。ウチは『どれでも鑑定団』に出してみようって言ったんだけど、パパたちが絶対ダメだって。曾お爺ちゃんに、門外不出にしろって言われたみたいでさ。なんかムカついたからいつそ壊してやろうと思ったんだけど、トンカチでぶっ叩いても傷一つつかなかった。ナイフで削っていたすら書きを追加しようとしても、意味なし、効果なし。挙げ句、隠されたわ」

「家宝をトンカチで割ろうとしたんですか！」

「いいじゃん。まあ、とにかく、そんな時に聞いたの。ウチは浦島太郎の家系で、あれは本物の玉手箱なんだって。だからイタズラをするなって。ちなみに、家系の詳細については『ただ先祖代々そう伝わってるだけ』みたい。ウチの竜宮ドライブについてもさっぱりだった。パパには、力を外では絶対使っちゃダメだって怒られたよ」

「あれ、滅茶苦茶能力外で使ってませんか」

「時と場合によるじゃん」

華子は分別があるかのように振る舞ってはいるが、能力を使う気満々なのは見てとれた。

「あー、話逸れた。とにかく、とにかくね？」

「うん」

「ウチは間違いなく浦島太郎の子孫なの。この能力がその証。ただ、多分この力は子孫全てに現れるようなものじゃないっぽい。時々思い出したように力を宿した子が生まれる——とかさ」

「それが華子だと？」

「そ。この神童が生まれてしまったわけだね」

「神童？ 寸胴の間違いじゃな……痛い！ 痛いから！ わざわざ教科書からシャーペン取り出して突かないで！ 冗談だから、もう言わないからあ……！ うええ……」

涙目の銀太郎である。

「とにかく、そういうウチみたいな存在が、夢の世界にもいたってことだよ。さしずめ浦島太郎本人、あるいはその子孫が、夢の世界で子を為した……ってとこかな。我が先祖ながら、超鬼畜だね。ちよつと萌える」

「先祖に萌えるとかアブノーマルすぎるよ！」

ちくちく刺された腕を撫でながら、銀太郎は言い返す。

「それで、華子はどうするの？ 君の『同類』が言っていたように、『同類』を呼んでみる？」

真剣に気になっていた。和服男の言葉通りに動けば、他の世界からこの世界に、華子の同類、壬の者とやらがやって来るのだろう。

世界がどれほど存在するのかは不明だが、同じ力を持つ者に接触すれば、確かに調査は進展すると思われた。……危険も倍増するが。

「それがいいかな。ウチは今まで、竜宮ドライブを夢の世界に潜ったり潜らせたりする能力だと思っていたけど、『今ウチらがいる世界も夢』っていう発想はなかった。確かめたい」

——君からしたら夢みたいなものでしょうね。逆に私たちからしたら、君の世界が夢みたいなものなんですよ。

和服男の言葉だ。竜宮ドライブ遣いだと思われる彼らにとっては竜宮城の世界が現実で、銀太郎たちが住む世界の方が夢なのだ。そうなってくると、話はややこしくなってくる。

「今までは現実として、夢の世界の頂点に立つ世界こそが、この世界であると考えていたんだけどね。けどその前提はもう通じない。一つの世界から見たら、他の世界は全て夢。だったら、当然この世界も夢ってことでしょ。少なくとも、ウチの同類から見れば、さ」
相対的な話だった。しかし、銀太郎もその見解には同意する。

世界に上下関係はない。この世界が現実で、他の世界が夢——なんていう解釈は間違いだ。

どの世界も確かに存在しているのだ。この世界と平等な立場で、並列に。

「全てが現実か、あるいはウチらの存在を含めて全てが夢か。調べるためには喚ぶしかないね」

「……全世界的に夢オチは嫌だなあ。醒めたらどこに行くんだか」「知らないよ。夢としてしか存在出来ないのかもしれないし。いや、でも、ウチらは現実だよ」

——何故ならホットケーキが美味いから。

真顔でそう言ってのける彼女を見て、少しだけ安心した。

非現実が続きすぎて、現実感が麻痺していたから、そういう現実的な発想は大歓迎だった。

「そうだな、ここは現実だ」

— 何故なら、ピクルスが不味いから。

[illegible]

「だめ、ずっと唱えてて」

⌈
⌊
⋮
⌋

何故だか繁華街に出ていた。華子曰く「ウチは人混みが好きなの」とのこと。

意味不明な感性だなと思いつつ、銀太郎はこれに従うことにした。壬の者よ来たれ、というよく分からない呪文の詠唱を義務付けられてはいるものの、端から見れば美少女とのデートそのものだ。故に、テンションが上がらないわけではない。とはいえ、口がiii加減疲れてきた。

「まったく、だらしないなあ。分かったよ、交換ね。ウチが唱えるから、亀は辺りを見回しててよ。分かった？」

了解、と答える。雑多な歩行者に、無愛想なビル街。飯に上手く壬の者を呼び出せたとしても、それっぽいい人間をこの交通量の中から見つけ出すのは大変そうだった。

普通の格好をされていたら非常に困る。銀太郎が世界を移動する

時、銀太郎を『喚びだした』であろう人間とは時々距離があった。最初のカグヤの時なんかがそうだ。故に今回も、呼び出し時の銀太郎たちと壬の者の位置に開きがある可能性があるだろう。

そうなった場合、この雑踏の中で互いを感じしあえるのか？ 頑張る、としか言えない。

銀太郎がふう、と息を吐いたところで、華子が静かに言った。
「壬の者よ、来たれ」

——全て杞憂だったことが、その瞬間よく分かった。
よく知っている顔が二つ。

一人は、敬語が鼻につくつり目のパーマ男。
もう一人は、ごつくて短気な雰囲気のアフロ巨漢。

完全に、竜宮城の二人だった。それが、道路を挟んで向こう側に忽然と現れたのである。

瞬時にして、銀太郎が彼らを見つけられたことには絶対的な理由がある。

そう——彼らは二人とも、いわゆる全裸だった。

「きゃああああああ！？」

「ストリーキングだあああ！？」

どこからともなく現れたストリーキングの存在に、突然繁華街はパニックに陥った。

「……うわあ」

「ねえ、あれ、まさか？」

「つていうかさつき言ってた二人組だよアレ。竜宮城の世界の二人なんであいつら……」

そこまで呟いて、銀太郎はハツとした。

「まさかハメられた……？ 奴ら、もしかして日本に来たかったんじゃないか……！？」

突然の思いつきである。銀太郎の考えが確かなら、利用されたということになる。銀太郎と華子は、竜宮城の世界と日本を繋ぐための架け橋にさせられたのかもしれない。

彼らが、この日本に踏みいるための媒体——召喚者として。

「なるほどね……そういうこと。ウチに喚ばれる瞬間を待っていたってわけね？」

華子も理解したようだった。思考力のある彼女は、頭の回転が速い。

「気をつける、華子。全裸でも、あいつらは危険だよ」

「あら、亀にしてはかっこいいこと言うじゃん。けどこれはこれでラッキー。ウチが直接あいつらに問いただすことが出来るもの」

自信満々に口元をつり上げた後、信号に青が点った。瞬間、華子が走る。慌てて追いかけたが、残念ながら銀太郎は百メートル二十秒台である。

「ウチは『悪魔の右手』、裏嶋華子！ さあ、名乗りなさい、壬の者！」

早くも横断歩道を渡りきった華子が叫ぶ。すると、またよく分からないことになった。

「ひいつ、ゆ、許してよお……！」

アフロが、いきなりガン泣きしたのである。

「てんめえ、またかよこの駄犬！ んでてめえは毎回そうクズみたいになっちまうんだよ！ たたくよお…… んで、てめえがそうなんだな女……？ 今の代の、壬の者ってか」

さらに、ウェーブパーマの男も態度まで、まるで違った。遅れて辿り着き、息を吐く銀太郎。怒りに顔を歪めるパーマ男と、泣き虫アフロの二人は、とんでもない違和感を醸し出していた。

「多分そうなんじゃない？ 知らないけどね。ところで、名乗れ」

尊大な調子で命令する華子。パーマの男は苛立ちを隠しきれない様子で、

「うつぜえなてめえ。生意気なガキに名乗るもんなんざねえよ」

堂々、挑戦の意を示した。

「……うつぎ。ウチ、ガキじゃないんだけど？」

「いいからとつとと、隠してる『玉手箱』を出しやがれ、ガキ」

「あなたはとつとと、出している猥褻物を隠しなよ、変態」

「……ああ？」

「……なに？」

勝ち気な少女と、短気な変態の視線がばちばちと交差し、炸裂する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8941z/>

竜宮ドライブ（高校生の異次元探索モノ）

2011年12月28日01時47分発行